エドワード時代のイギリス騎兵

――アングルシィ侯爵の研究を中心に――

根無喜一

はじめに

一五世紀から一九世紀にかけてのヨーロッパでは、その兵器体系の発展は、実にゆったりとしたものであった。大砲や小銃の出現と改良も、人間や馬の能力それ自体によって課せられた機動性の限界を越えることはなかった。馬の速度と重量感は人々を魅惑して止まなかったから、颯爽と疾駆する騎兵は、戦場の華であり、平時には伝統的支配層の力を象徴する存在であり続けた。しかし特に一九世紀後半から加速度的に進行した兵器の技術革新は、長い命脈を保った歴史的戦術を大きく変化させることになる(1)。

本小稿では、火力の猛威と機械化のなかでその名誉ある地位を激しく翻弄されたイギリス騎兵が、二〇世紀初頭に受けた衝撃と対応を、現代イギリスの著名な騎兵研究家アングルシィ侯爵の『イギリス騎兵史　一八一六―一九一九年』第四巻（一九八六年）をてがかりに、考えてみたい(2)。この『騎兵史』は一九世紀のイギリス騎兵に関する膨大な研究であるが、本第四巻は一八九九年から一九一三年までを取扱っている。

アングルシィ侯爵家は、その家系を一六世紀にまで辿れる旧い門地であって、特にワーテルローの戦いでウェリントン公の副官かつイギリス騎兵司令官として活躍し、ついに戦闘の最終段階で自らの片脚を失うことになった初代アングルシィ侯ヘンリ・ウィリアム・パジェット（一七六八―一八五四年）が有名である。現代の侯爵はこの勇敢な祖先の伝記『一本の脚　初代アングルシィ侯爵の生涯と書簡』（一九六一年）を著わしている。

アングルシィは一九一三年生まれであって、現在はウェールズ北西に位置する父祖伝来の地アングルシィ島プラス・ニュイドに健在である。彼はこの由緒ある地所を一九七六年にナショナル・トラストに移管したのであるが、アングルシィは、「陸軍歴史協会」の副会長、「ヴィクトリア朝軍事協会」の総裁、「王立歴史学協会」の名誉会員、ウェールズ大学の名誉文学博士等々、学術・文化面で一家をなす一方、州副知事を歴任するなど、政治家としてもその才能を発揮している。彼は一九四六年に近衛騎兵隊の少佐であって、名門騎兵の子孫としての面目を躍如とさせている(3)。

彼は一九七三年『イギリス騎兵史』第一巻を上梓して以来、七五年に二巻、八二年に三巻を世に送ったが、第一次世界大戦中の騎兵の過酷な運命を扱う第五巻は、現在準備中であると言う。

さて第四巻の主要テーマは二つある。まずは言うまでもなく大ブーア戦争とイギリス騎兵の関係であり、他は、戦争直後から第一次世界大戦勃発まで、はなばなしく展開された「大騎兵論争（グレイト・キャヴァルリ・ディベイト）」に関してである。アングルシィは、イギリス国防省図書室、陸軍史博物館（ナショナル・アーミー・ミュージアム）その他もろもろの機関及び個人所蔵の根本史料を駆使して、この時期の騎兵の真相に迫っているのであるが、先行する業績を咀嚼・消化することも忘れない。特に騎兵論争について、共に現代イギリスを代表する軍事史家、ブライアン・ボンド、エドワード・スパイアーズの重要な研究の成果は十分に取り入れられている(4)。

本文五〇二ページ中、ブーア戦争の戦史に三四四ページ、戦後の騎兵論争その他に一二六ページがあてられている

が、これは後者が軽視されたためではなく、前者の戦史部分のディティル叙述に多くのページが費やされたことによる。「序文」約二ページ半大半が、騎兵論争のサーヴェイであることからも、以上の経緯は理解できよう。アングルシィは以下の七点の問題をめぐって、この騎兵論争の顛末を明らかにする。一、自動・長射程の火力が馬匹をして単なる移動の具に格下げさせたのか、それとも依然として騎兵は、陸軍の「兵器体系（ウエポン・システム）」の一部分として、使用され得るのか。二、戦線拡大の結果騎兵は、戦略的、偵察的、掩護的役割を従前よりも増大させたのではないか。三、騎（マウンテッド・アーム）兵によって携行さるべき武器は何が望ましいか、また剣とランスは廃絶されるべきなのか。四、近代的諸条件のもとでの、「騎兵精神（キャヴァルリ・スピリット）」の意味は何なのか。五、全陸軍的規模で高まる「専門主義（プロフェッショナリズム）」は、騎兵の場合如何に作用したのか。六、ブーア戦争と日露戦争の教訓は、如何に受取められたのか。七、フレンチやヘイグなどに代表される守旧派的騎兵学派の見解のある点は、騎兵論争及び客観情勢の変化の過程で、徐々に変化したことは英国的叡知ではないか。

こうして一九一四年八月に大陸に渡ったイギリス派遣軍（BEF）は、高度に効率的な戦闘組織（ファイティング・マシン）であったと言えるであろう。

注

(1) マイケル・ハワード　奥村房夫・大作訳『ヨーロッパ史と戦争』学陽書房　一九八一年　一四四―四五ページ参照。

(2) The Marquess of Anglesey, *A History of the British Cavalry 1816—1919*, vol. 4, London, 1986. 本小稿では三七六―五〇二ページを中心に考えたい。

(3) *Who's who 1989*, London, p. 39.

(4) Brian Bond, 'Doctrine and Training in the British Cavalry, 1870—1914' (ed.), Michael Howard, *The Theory and Practice of War: Essays Presented to Captain B.H. Liddle Hart on his 70th Birthday*, London 1965. *The Victrian Military Campaigns*, London, 1967. Edward Spiers, *The Army and Society* 1815—1914, London, 1980. 'The British Cavalry, 1902—1914,' *Journal of the Society for Army Historical Research*, LVII, 1979.

一、エドワード時代の陸軍改革

――陸軍の制度化・一体化と陸軍省人事が騎兵に与えた影響――

ブーア戦争での苦々しい経験とますます逼迫するヨーロッパ情勢は、イギリス陸軍に新しい戦略的課題とそのための自己変革を痛感させる。海軍にならって、陸軍の最高意志決定機関である「陸軍参事会（アーミー・カウンシル）」が一九〇四年、陸相、参謀総長、軍務局長、補給局長、兵器局長、陸軍財務官、それに書記官としての陸軍事務次官によって構成された。一方当時の軍事問題の大立者イーシャー子爵らの唱導で、ナポレオン戦争時より続いた総司令官府が廃止され、陸相に下属する近代的な参謀本部が創設された。カードウェル改革（一八六八―七四年）に匹敵する事業をホールデンが実行に移す直前に、イギリス陸軍省は変化の淵に立っていたと言えよう。前任者アーノルド＝フォスターと異なり、ホールデンはイーシャー支援のもと、多くの有能な陸軍省高級将校の支持と助言を得ることができたが、それがこれらの高級将校に部内である意味で過大な影響力を与えたことも否定できない。その一人で改革推進に辣腕をふるったが、騎兵将校ダグラス・ヘイグであった。彼は一九〇七年一一月新生参謀本部内での枢要な地位、服務課長（ディレクター・オヴ・スタッフ デューティズ）に就任し、一九〇九年インド軍でキッチナーの参謀になるまで、その役割を果した。ヘイグは、一、補助軍・予備軍の再建、二、後に『野外勤務令（フィールド・サーヴィス・レギュレーションズ）』として結実するが、全兵科に跨がる統一的・基本的マニュアルの作成、三、一九〇七年の植民地会議の結果、設立が熱望された帝国参謀本部樹立と充実、四、効率的な動員計画の策定、五、陸軍大学の管理等々の広汎なしかも、陸軍の本質にかかわる案件でよくホールデンを助け、改革を推進した。特に第一点に関してアングルシィは、「これへの貢献の大部分は―偉大な騎兵―ヘイグに帰せられる」と、その活動ぶりを高く評価している。

陸軍の組織化・統合化のなかで、従前の如き現場主義的な小規模な訓練マニュアルは、許されない。ブーア戦争の不首尾からこれをもっとも痛感したヘイグが目指したものは、かつてローリンソンやウィルソンがロバーツの監督下で作成した『共同訓練（コンバインド・トレイニング）』などとは、展望と内容の点で異質の、壮大なものであった。参謀本部内の一課長の動きを察知した、軍務局、補給部さらには作戦課からは、権限をめぐる抗議の声が上った。参謀総長リトルトンは弱々しい支持をヘイグに与えることができたのみであった。しかしホールデンは、ヘイグを強力に支援した。こうして一九〇八年一二月二三日、「陸軍参事会」の軍人メンバーはヘイグに説得されて、『野外勤務令、第二部』発行に同意することになる。イギリス陸軍にかつて存在しなかった共通のドクトリンができたのである。このマニュアルはその基本線を第一次世界大戦勃発時頃まで、変更されなかった。

『野外勤務令』の「騎兵部門」を執筆したのはヘイグ自身であり、彼はここで近代火器の効用を認めながらも、伝統的白兵戦論を擁護することを忘れなかった。

二、「大騎兵論争」

――ロバーツ改革と守旧派（オウルド・スクール）の巻き返し・イギリス式妥協と火器を採用し、高度に専門化された伝統的騎兵の出現――

一九〇三年九月ロバーツ卿は、将来の騎兵戦術検討委員会を主催するが、彼はキッチナーにヘイグが守旧派に属し、彼らに甚大な影響を与えていると、嘆いている。アングルシィによるとかかる論議は、必ずしも誤まりではないが、本質的に騎兵将校の大部内は、守旧派であると言う。この委員会に先立ち一九〇三年三月一日、なおイギリス陸軍総司令官の職にあったロバーツは、「《騎兵装備》に関する回状」で、「騎兵は一般的に徒歩戦に従事すべし。小部

隊は白兵戦術（ショック・タクティクス）を利用することによって、すべての兵科を効果的に襲撃できる」とし、白兵戦術用には剣（スウォード）のみで装備されるべきであって、従来騎兵の主要武器であった「槍（ランス）」は、「厄介な槍（カンバーサム・ランス）」であり、騎兵の主要任務は偵察（スカウツ）と斥候（スカーミッシュ）であるとの見解を明示していた。同年三月の「軍令三九号」では、「将来騎兵連隊は、カービン銃《ライフル》と剣で装備されるべきであり、槍騎兵近衛隊、竜騎兵連隊は現在の如くランスを保持するであろうが、それは儀仗（エスコート・デューティ）義務、閲兵式（レヴューズ）その他の式典時のみであり、護衛（ガード）、戦場、演習もしくは現役勤務では装備されない」と、改革路線が打出された。もっとも彼も、歩兵に対する銃剣の如く、騎兵にはランスが存在することを認めて、騎兵の基本的訓練として、教練においてのランスを否定することはなかった。ロバーツは、徹底した近代論者であった若き日のウィンストン・チャーチル、歩兵出身で一八八四―五年のナイル遠征で活躍し、ブーア戦争中は乗馬歩兵（マウンテッド・インファントリイ）の充実に活躍したダンドナルド伯などの改革派（ニュー・スクール）の人々によって支持されていた。公式にもこうした騎兵装備と戦術面での改革は、消極的ながらも参謀総長リトルトンを含む、陸軍参事会のメンバーに受入れられる。後年ランスがこの参事会において、実戦武器として復活させられることを考えると、これは興味深い点であろう。

これに対する守旧派の反撃はすさまじかったが、彼らの論点は大体以下の二点に要約できる。まず、軍事史研究家及び軍事技術に造詣深い工兵出身のフレデリック・モード中佐は、「剣とランスを彼ら《騎兵》は用いるが、これはその真正の目的である凝集力が得られるならば、重要性において二義的である」と述べ、携行武器それ自体に関しては、ロバーツ改革に必ずしも牙をむかなかったが、凝集した突撃力としての機能が十分尊重されるか否かに関しては、改革に疑問を投じた。インド軍の騎兵監となったレミントンも、機会は極めて限定されることを認めつつも、騎兵の白兵突撃が戦闘の帰趨を決するものであると、主張した。すなわち徒歩戦重視への敵意が存在した。

一九〇三年四月ヘイグは、ランス装備のヨーロッパ大陸の騎兵との戦闘を想定して、「私はランスを廃止することは、賢明だとは思わない」と公言した。彼はランスを軽量化・短小化し、騎兵の機動力を増強させるべく、さまざま

な工夫をしている。一九〇四年にネザーエイボン騎兵学校副校長となったマーティン・アルチャ・スィー少佐は、折畳み槍を考案したが、これはその強度に問題ありとして、バーデン＝ポウエルらに反対された。彼らにとって、如何なる形式であれランスそれ自体は絶体に廃止されてはならなかったのである。

もっともヘイグがブーア戦争以前から戦中にかけて、比較的開明的な騎兵論者であった点は注目に値する。一八九二年、彼は『騎兵の徒歩戦に関する覚書』で、徒歩戦と白兵戦術が必ずしも矛盾するものではない点を明らかにし、戦時中はブーア人のポニーをかつての移動の迅速さと巧みな側面攻撃の技術を賞讃していた。ヘイグはロバーツによる騎兵改革に対して身構えたのである。

一九〇四年、七年、一二年と改訂された『騎兵訓練（キャヴァルリ・トレィニング）』を検討することによって、ブーア戦争後の騎兵改革と、それへの頑強な抵抗と経緯を考えてみたい。騎兵の戦術マニュアルとして、一八七四年の『オールダーショットで騎兵のために暫定的に認められた騎兵の運動』、一八七六・八五・八七年の『騎兵の指揮と運動の規範』、一八九一・九六年の『騎兵訓練』（暫定的）、ブーア戦争直前の一八九八年サー・ジョン・フレンチ主幹で世に出た『騎兵訓練（キャヴァルリ・ドリル）』などを、指摘することが可能である。

ヘイグらが意欲的に取組んだ一九〇四年の『騎兵訓練』は、索引を附すなど、いくつかの新機軸を打出したが、とりわけ異色であったのは、ロバーツがこのマニュアルの守旧性を警戒して、自身で「序文」を寄せたことであろう。この『騎兵訓練』のカナダ版では、当時この国の民兵（ミリティア）を指揮していたダンドナルド伯がロバーツ流の「序文」を書いている。カナダとは異なり、イギリス本国陸軍の騎兵は、ロバーツの序文をきわめて冷ややかに迎える。

一、長射程砲とライフルの出現によって騎兵の役割はいよいよ重要。二、急襲力のみではなく、小型ライフルを装備し過去とは異なった機能遂行。三、火器主力で白兵は二次的。四、徒歩戦においても騎兵のエラン élan は堅持可。五、白兵戦術拘泥不可。アングルシィはこうしたロバーツの序文の主旨は、中庸を得たものとして評価しているけれ

ども、騎兵将校はこれに猛反撃を開始し、陸軍参事会に圧力をかけた。一方ロバーツもその主張が認められないならば、「帝国防衛委員会（CID）」のメンバーを辞すと洩らすに至って、両者の緊張は極度に高まったのであった。

「序文」は、ロバーツがイギリス陸軍総司令官を罷めるのと同時期に、六カ月の暫定措置として公表を認められた。総司令官府の廃止を含む陸軍改革のなかで、ロバーツはその昔日の影響力を喪失していた。騎兵の高級将校の間で、ロバーツを「単なるベンガルの砲兵」と決めつけ、「このインドの異端者は、何と大胆に《神の武器》に干渉するのだろうか」と、彼への反発を露骨に示す風潮が濃厚であった。騎兵将校のかかる反インド的・排他的な姿勢は、論争を通して常に登場する議論であって、注目して置いてよい。

ロバーツは機能的には当時の歩兵銃とまったく同様で、より小型化・軽量化されたライフル、「短銃身連発ライフル、リー・エンフィールド　マークⅠ」を騎兵用ライフルとして提唱した。歩兵の射撃課程が騎兵にも採用されることになり、騎兵の射撃術も少なくない向上を見た。以上の情況でイギリス騎兵は第一次世界大戦を迎えることになろう。ロバーツは鞍（サドル）ではなくて、兵士自身に携行されるライフルを、一八七九年の第二次アフガン戦争の経験から強く望んでいた。これは一九〇八年インド軍でキッチナーの指導下断行されたが、本国では実現しなかった。以上の装備上の改革は、徒歩戦と騎乗行動を一連の流れ作業にするものだったからである。すなわち、近代火力は伝統的騎兵戦術の枠組のなかで位置づけられるならば、全く無視されたわけではないことも理解できる。

一九〇七年の『騎兵訓練』では、剣とランスの訓練は「附録」にまわされたけれども、「ライフルは、馬のスピードと突撃の魅力と白兵の脅威によってもたらされる効能にとって変わることができないことは、原則として認められねばならない」と、守旧派の見解が全体に強く打出されていた。この版では「ライフル」という言葉は、索引からも消えていた。ライフルが正式に鞍の小銃嚢に装備されることになったのは、この時であった。これは騎兵そのものが、その歴史的運命をとじる一九三〇年代後半まで、変更されることはなかった。当時、ドイツの守旧的軍事理論家

ベルンハルディは、「剣が鞍に取付けられるべきであり、カービン銃は兵士が携行すべし」と、述べたと言われる。

ロバーツの流れを汲む人物に、歩兵出身で日露戦争に乃木第三軍でインド軍を代表して観戦武官を務めたイアン・ハミルトンがいる。彼は一九〇三年ブーア戦争調査委員会（ロイヤル・コミッション）で、「近代的ライフルと比べるならば、剣やランスは単なる中世的頑具にすぎぬ」、騎兵の主要任務は哨戒（スカウティング）と偵察（リコネイサンス）であると、刺激的発言をした後で、「騎兵はライフル同様、剣で装備せよと言いたい。そうでなくても近代的諸条件のもとでは、ライフルには当然しかるべき地位が与えられるべきである」と、明言した。もっともヘイグも哨戒と偵察が騎兵の重要な機能であることは認めていたが。南アフリカでロバーツに従い、陸大で教鞭をとり、『戦争の科学』で著名なヘンダーソン大佐は、小口径銃と無煙火薬が伝統的騎兵戦術を無効にしてしまったことを認める人間の少なさを、嘆く。しかし一九〇七年一一月にはコンノート公に代わり、陸軍総監（インスペクター・ジェネラル・オヴ・フォシイズ）になるなど陸軍省部内で着実に影響力を高めつつあったフレンチは、かかる改革派的論議には懐疑的であった。彼は、ハミルトンをロバーツに入れ知恵する人物として、好ましく思っていない。

一九一〇年の『騎兵訓練』は、七年版と大差ない。一九一二年版ではもちろんロバーツの「序文」は削除されているが、白兵戦一辺倒の論議は少し後退する。すなわち攻撃がなされる時、白兵と火力両者のどちらか一方が用いられる必然性はない。なぜなら、火戦（ファイアー・アクション）は白兵戦への好ましい機会を与えるからである、と。「ショック・アンド・ファイアー・アクション」論の台頭との関連において、守旧派の代表ヘイグが、一九〇九年よりインド勤務に就いていた点は、注目しておいてよい。

陸軍省部内の人事が守旧派に有利に作用したことは事実であるが、彼らが組織的な広報宣伝活動を行なったことも忘れてはなるまい。一九〇六年、白兵突撃を神聖視し、金科玉条とした『騎兵雑誌（キャヴァルリ・ジャーナル）』が創刊される。この雑誌を中心に「古きよき時代」の騎兵論を展開したのは、一九〇三年から七年にかけて騎兵監を務めたバーデン＝ポウエル、極端な守旧派チャールズ・ゴウルドマンらである。初代の編集者は、第一一軽騎兵連隊のオズバート・ラムレイ

大佐であって、編集責任は『ユナイテッド・サーヴィス・マガジン』が負っていた。一九〇八年より編集責任は、一九〇四年春に騎兵の専門化を目指して設立された騎兵学校のスタッフに引き継がれ、一一年から一四年の間は校長が、この責任者になる。軍事専門家、将校が寄稿者であったが、論調はおしなべてクリミア戦争以前の騎兵の活躍や役割の普遍化・固定化であった。

守旧派は一九世紀前半の「弓と矢（ボウ・アンド・アロー）」派的環境においてのみ安住の地を見出したわけではなかった。ブーア戦争と日露戦争の経験は、騎兵の伝統的機能に都合のいい解釈を与える場であったように思われる。

エランドシュラーグテ（一八九九年一〇月二一日）などいくつかの例外を除いて、騎兵はその伝統的戦術の成果を示す機会に恵まれなかったため、守旧派は南アフリカの戦争は騎兵論議の対象外だとすることができた。ブーア人は、白兵戦術を敢行することができないから、ゲリラ戦術を展開しただけであって、騎兵対騎兵の対決が予想されるヨーロッパ戦争の参考にはならない、というのがフレンチの論理であった。陸大出身の俊英ではあるが、実戦経験の乏しいモード中佐は、バーケンラーグテ（一九〇一年一〇月三〇日）でベンソンを攻撃したコマンドーが白兵突撃を実行していたら、結果はイギリスにとって恐るべきものだったろうと、ステレオ・タイプ的議論をする。騎兵の白兵戦術そのものが、ライフル射撃によって封じ込められてしまった事実を考えると、こうした守旧派の主張には無理がある。

フレンチは、イギリス正規騎兵がブーア人の展開した徒歩戦に勝利したことが多々あるにもかかわらず、そうした戦線は主要な前線から遠く隔っていたため、総司令官の目に触れなかっただけであり、司令部（ヘッドクオーター）の幕僚にも気づかれなかった故に、歴史から消し去られたと、述べる。いずれの場合も騎兵は白兵兵科としての機能を発揮することきわめて少なくそれ故、致命的な敗北を喫することも、決定的勝利を得ることもなかったことが言わしめた議論である。

塹壕・鉄条網・マシンガン・速射砲と近代兵器が戦場を支配した日露戦争では、騎兵に与えられた役割は、きわめ

て限定された。日本の騎兵は数的劣勢で、ランスをも携帯していなかったが、白兵戦至上のドイツ式の訓練を受けていて、戦場では勇敢に戦った。一方ロシア騎兵は、ヨーロッパ主要国騎兵と異なり、徒歩戦と火力を重視した結果、馬匹も良好であったのに敗北したと、守旧派はロシアの敗因を分析した。これがイギリスの「白兵戦術（アルミ・ブランシュ）」派を勇気づけた誤解である。改革派ハミルトンは、一九〇四年五月の鴨緑江戦に関して、馬はライフルマンの単なる移動の具でしかなかったと正しい評価を下しているが。

騎兵がもっとも恐れていたものは、このハミルトン的議論であった。徒歩戦は彼らが信じていた神聖で特殊な「騎兵精神（キャヴァルリ・スピリット）」をその根底から破壊すると、思われたからである。ギャロップする馬、集団で駆けめぐる心地よさと興奮、これらはバーデン＝ポウエルが「ベスト・センセーション」と呼んだものであるが、この中にこそ騎兵精神は宿ると、信じられていた。一九〇二年にヘンダーソン大佐は、「騎兵のもっとも貴重な財産である突撃は、訓練にあっても戦時にあっても、決して他から干渉されるべきではない」と、騎兵精神の特殊性を強調する。フレンチも一九〇四年三月、陸軍参事会への報告で、「騎兵は、その人生の大半をそのために奉仕した人々にしか判らない兵科である。騎兵の力のエッセンスは、《騎兵精神》と呼ばれるもののなかにある」と、論じた。騎兵精神は、エランでありそれは突撃（ダッシュ）によって体現され、常に攻勢を採る固い意志とともにあると、されたのである。徒歩戦重視すなわち白兵突撃（ショック・タクティクス）が例外的とされるならば、騎兵は騎兵としての存在意義を喪失するであろう。ヘイグと異なり射撃の重要性を十分認めていたフレンチでさえも、ヨーロッパの伝統的騎兵に対しては、改革派流の騎兵戦術では対抗不能であると、力説したのである。

騎兵側のこうした議論に対してロバーツは、E・チルダースの『戦争と白兵』（一九一〇年）への序文で、騎兵だけが「精神力」を必要とされているわけではないし、他の兵科も事情はまったく同様であると、反論した。彼はさらに騎兵精神は突撃のみでなく、偵察や哨戒にも必須であることを強調して止まない。

陸軍省のポストを上昇し、視野が拡大するにともなってフレンチは、かかるロバーツの主張に耳を傾ける余裕を見せ始めるが、騎兵将校の大部分はその従前のステレオ・タイプ化された論理に縛られていた。サー・イーヴリン・ウッドや一九〇三年から七年まで騎兵監（インスペクター・ジェネラル・オヴ・キャヴァルリ）を務めたバーデン＝ポウエルら守旧派は、騎兵精神の象徴としてランスの実戦武器としての復権を画策する。一九〇三年の軍令第三九号でランスが原則として廃止されて以後、守旧派は二つの方式でこの伝統的武器を舞台の前面に押出すことに成功した。現場では軍令が必ずしも履行されず、済崩し的にランスの生存が計られた。一九〇七年、すべて槍騎兵で構成される第一騎兵旅団は諸連隊で、訓練でも野外教練（フィールド・トレイニング）でもランスが維持された時、旅団長スコベル少将はこれらを好意的に受止めたし、フレンチも軍令違反を問題にしなかった。軍令違反はオールダーショットでもエディンバラの駐屯地でも、公然となされた。次にこの軍令をめぐって騎兵側は陸軍省内の人脈を利用して、陸軍参事会に働きかけた。一九〇四年、六年、七年の年次報告において、陸軍総監（インスペクター・ジェネラル・オヴ・フォーシーズ）も、ヨーロッパ諸国の騎兵に対抗するために白兵武器が不可欠であることを強調した。一九〇九年、「軍令一五八号」において、ランスが復活する。ロバーツは、改革派と考えられた帝国参謀総長サー・ウィリアム・ニコルソンに抗議したが、彼は「もとの軍令はあまりにも先へ行きすぎていたのか、まったく徹底しなかったかのどちらかだ」と、応えることができたのみであった。ランスは、これを儀礼用にのみ用いることを規定した一九二七年の「軍令三九二号」まで、現役武器となった。

一八八六年、「乗馬歩兵の価値は、来るべき大戦争においてきわめて注目すべき特徴となるだろう」と、ブラーは予言し、実際乗馬歩兵はブーア戦争で大活躍をした。けれども大戦勃発一一ヵ月前の一九一三年に陸軍参事会は、乗馬歩兵は将来ヨーロッパ大陸では使用しない旨を決定し、乗馬歩兵を含む二つの騎兵旅団を解散させた。この措置は「タイムズ」の通信員レピントンによって、「貧しい騎兵」が処分されたとして賞讃されるが、これはスパイアーズの指摘のように、火力（ファイアー・スクール）派の挫折の好例と考えられる。

ブーア戦争開始時以前にも少数の乗馬歩兵はオールダーショットとハウンスローで訓練を受けていた。戦中の活躍は周知の如くであるが、戦後も一九〇六年までに三つの乗馬歩兵学校が設けられ、イギリス本国歩兵八〇の大隊からそれぞれ一中隊が選抜されて、乗馬歩兵としての教育がほどこされた。

これら三つの乗馬歩兵学校の二つは、一九〇七年までに閉鎖された。オールダーショット乗馬歩兵学校校長アレキサンダー・ジョン・ゴッドレイですら、乗馬歩兵を常設部隊とすることに反対していたのである。乗馬歩兵は、あくまでも暫定的な苦肉の策であって、《不必要な雑種（ハイブリッド）》だと考えられた。一九〇五年の騎兵監の報告では、乗馬歩兵は正規騎兵や他の兵科との関係がはなはだ曖昧であるとの認識が示されている。乗馬歩兵は、通常四組の人馬で一つの戦闘単位を形成していた。徒歩戦では三人が戦闘に従事し、他の一人は馬を管理した。馬と兵士が分離されることによって、これらの馬は退却用であったから、戦っている兵には常に帰路の安全に関する不安が発生することになる。四頭の馬の面倒をみることも容易ではあるまい。乗馬歩兵はその戦闘構造の基本において脆弱であると、ヘイグなど反対論者は主張することができた。

乗馬歩兵への憎悪は、以上の技術的問題につきるものではなかった。ブーア戦争で乗馬歩兵戦闘の経験はしたが、白兵戦術の経験が皆無に近い騎兵将校達が、厳しい反乗馬歩兵論を展開したのである。彼らは精緻な白兵戦術を徹底して教育されていたため、それへのアプリオリな信仰をなすにいたった。こうして、ブーア戦争の記憶が過去のものになるにつれて、乗馬歩兵への侮蔑の念が深まったのである。E・チルダースはロバーツに、「迷信は不朽であり、それは打ち勝ち難く思われます」と、迷懐したのはこの意味においてである。一九一〇年までに騎兵の訓練スケジュールは、白兵訓練に八割、火戦戦術に一割、残りの一割を偵察訓練にあてられていた。

騎兵論議は、新旧両派共雑誌論文、単行本などさまざまな場面で熱っぽく行なわれたが、これに関して以下の二点に注目しておきたい。

まず守旧派は、その論理の正統性をヨーロッパ大陸で支配的な騎兵議論に求めた。フランス第三〇竜騎兵連隊の高級将校と考えられるのであるが、イニシャルをP・Sとのみ記された匿名フランス人の『将来戦争の行動における騎兵』（一九〇五年）にフレンチは十分敬意を払いながら、序文を寄せた。彼は、騎兵は乗馬したライフルマンとしての機能を有する点を認めつつも、「決定的勝利は、《白兵戦術》すなわち剣とランスをふるう高度に訓練された騎兵のすぐれた道義上の力の採用によってのみ得られることは、忘れられるべきではない」ことを、強調する。この場合、騎兵対騎兵の戦闘が想定されていること、言うまでもない。

一九〇六年ゴウルドマンは、軍事専門家として夙に高名であったドイツのフリードリヒ・フォン・ベルンハルディ中将の、『将来戦争における騎兵』（一八九九年、一九〇二年改訂）を訳出した。フレンチは、騎兵の役割は付随的だとする多くの「アマチュア」を、笑止だとしたベルンハルディを激賞して、ここにも序文を書いている。彼自身も、トーナメントや騎兵精神を軽視している人々を、専門騎兵として嘲笑した。

第二に以上の守旧派の見解にロバーツも激しい反論を展開したが、改革派の論議を徹底して開陳したのは、気性激しいアイリッシュ、エルスキン・チルダースであった。チルダースは、南アフリカで砲兵を経験し、後年レオ・エイメリーの監修下、『南アフリカにおけるタイムズ戦争史』執筆にあたり、ドイツ海軍のイギリス本国への脅威を力説するなど、多面的活躍で知られていた。彼は、白兵・密集攻撃は過去の遺物であると述べ、騎兵はよき射撃手であると同時に、歩兵式戦闘方法を習得させられねばならないと、断じた。一九一一年、『イギリス騎兵に対するドイツの影響』で彼は、フレンチなどがベルンハルディら大陸的見解を重要視しすぎていると、批判する。ベルンハルディは、ドイツ騎兵の近代化について論じているのだから、そうした論理はイギリスに全面的に妥当するものではない。守旧派のベルンハルディからの引用に、姿意性・セレクションが目につく点も痛罵される。騎兵は、旧式の騎士的戦闘法に拘泥してはならないと述べながらベルンハルディは、白兵戦術を神聖化している。彼自身にあってはこれらは

整合性を有するやも知れぬが、そうした議論の一方の論調を盲信することは、危険であろう。チルダースは、イギリス騎兵が外国のモデルの模倣をやめてイギリス自身の戦争経験と民族的資質に基づいた論理を構築すべきであると、声を高くする。

事実、ヨーロッパ大陸の騎兵論の衣裳をまといながらも、ブーア戦争という実戦を経験したイギリス騎兵は、必ずしも大陸のそれらと同列に論ぜられない。ドイツのルドヴィク・コッホ大佐やフランスのフランソワ・ド・ネグリエなどごく少数の例外を除き、ドイツ、オーストリア、フランスさらにはアメリカでも、イギリスで生じたような騎兵論争は、存在しなかったと言ってよい。乗馬歩兵も大陸では見あたらない。白兵戦術一辺倒から、騎砲兵、マシンガン、ライフルを用いた火戦と白兵との合同戦術が論じられたのは、日露戦争末期からのことであるが、独・仏両国の公式のマニュアルは、イギリスのそれよりもはるかに白兵の攻撃精神が強調されていたし、アメリカの軍事理論家は、第一次世界大戦中ですら、ショック・タクティクスに固執していたのである。

一九〇七年秋フレンチは、コンノート公を継いで陸軍総監（インスペクター・ジェネラル・オヴ・フォーシズ）となった。新たにオールダーショット司令となったのは、歩兵出身のスミス＝ドリアンであって、この交代劇は守旧派の騎兵への少なくない打撃となった。スミス＝ドリアンは、白兵重視のあまりオールダーショット騎兵旅団の年間の射撃訓練がおろそかにされていること、演習での徒歩戦軽視に強い不快の念を示した。彼は一九〇九年夏から、徒歩戦強調に奔走し、この結果イギリス騎兵は第一次世界大戦には、火戦にある程度精通して大陸に送られたのである。

一九〇八年七月と一二年のオールダーショットの演習において、歩兵に虚を突かれるなど、騎兵の不首尾が目立った。一九〇四年には、自分の騎兵認識は不変であると、ロバーツに語っていたフレンチは、除々にその守旧派的見解を、こうした現実に即して修正して行く。一九〇八年には騎兵の徒歩活動の拙劣さを指摘し、九年には騎兵が火戦に習熟することを望むに至ったのである。一歩もその立場を変化させなかったのは、ヘイグであり彼は、フレンチが異

教にくみしたと嘆いていた。

フレンチが一九一二年にニコルソンを継いで帝国参謀総長になると、陸軍総監には歩兵出身でロバーツと第二次アフガン戦争を共にしたサー・チャールズ・ダグラス将軍が決まった。一九一三年にダグラスは、白兵戦術が最終的結果をもたらすとしても、その犠牲もまた甚大であることを、騎兵司令官達に印象づけねばならぬと、述べた。

大戦が近づくにつれて、陸軍の高級人事、さらには戦術考究や訓練の現場で、改革派、または改革派ではないにしてもヘイグ的旧套墨守派以外の人士が目につくようになる。それはイギリス騎兵の近代化にある種のインパクトを与えた。

おわりに

騎兵は火器をもその伝統戦術に沿った方式で装備して、依然としてイギリス陸軍の「兵器体系」の一角を構成したし、戦線の拡大にともなうその偵察機能は、なんぴとにも否定されはしなかった。そして騎兵が騎兵としての戦術的役割を果すのに、本質的に必要と思われたランスは、激論の末生き残ることに成功した。それは大部分の騎兵将校が渇仰して止まない「騎兵精神」の象徴だったからである。彼らは本国の専門騎兵としてそうした精神主義を標榜し、植民地戦争での経験や、騎兵以外の兵科の議論に固く心を閉した。騎兵学校が設けられたことも、彼らの専門主義を強化させた所以であろう。専門家として『騎兵雑誌』など幅広い広報活動を行なったのである。ロバーツ改革が頓挫せしめられたのは、基本的にはかかる理由による。それに日露戦争とブーア戦争で、騎兵がその本来の役割であると考えられた機能を発揮する機会がなかったことは、騎兵守旧派に都合のよい論理を展開させることができた。

すなわちこのエドワード時代に、イギリス騎兵は「奇跡的と言ってよい」（B・ボンド）生命力を示した。しかし

この生命力は決して頑なな旧態維持からのみ得られたものではなかった。E・チルダースですら、「その白兵への依存は過度ではあるが、我が騎兵は火戦において大陸の競争者の先頭に立っている」と、認めている。J・テレィヌも「イギリス騎兵は、射撃することのできたただ一つの騎兵である」と、述べた。この点ではフレンチ――ヘイグ学派の敗北と言っても可であろう。アングルシィは、「大騎兵論争」のなかに、「妥協を求めるイギリス特有の資質」の一側面を指摘している。ロバーツの努力は決して徒労ではなかったのである。

――文学部助教授――